



樹蔭静け

北海道帯広三条高等学校
〒080-2473
北海道帯広市西23条南2丁目12番地
TEL：0155（37）5501
発行日 令和3年9月30日

＊全校でシトラスリボンプロジェクトに取り組みました＊



保護者のみなさんはシトラスリボンプロジェクトをご存知でしょうか？

本校の家庭科、小林郁美教諭は朝刊の全面広告の「距離を取ること、距離を置くことはちがう。」というコピーに目を奪われました。

新聞広告には『本当は気をつかったの行動のつもりが、「距離を置かれている」と、新型コロナ感染者やその家族、医療従事者をはじめとしたエッセンシャルワーカーを不安にさせているかもしれない。そんなつもりはなくても、無意識のうちに生まれる差別や偏見があることを知ってほしい』とのメッセージが記されておりました。そもそもこのプロジェクトはコロナ禍で生まれた差別、偏見を耳にした愛媛県の有志が始めたもので、特産の柑橘にちなんだシトラス色のリボンを身に付けて、「ただいま」「おかえり」とそれぞれの暮らしの場で優しく受け入

れる気持ちを表す活動です。リボンで表現する3つの輪は、地域と家庭と職場（学校）。十勝でもこの活動を広げようと「シトラスリボンプロジェクトfrom十勝」がシトラスリボンづくりに参加する学校を募集していました。小林教諭は家庭科の目標である「よりよい社会の構築に向けて、地域社会に参画しようとする態度を育てる」に合致するとして、1年次は「家庭基礎」、2年次はLHR、3年次は選択教科「ライフデザイン」で、リボンの作製に取り組みました。生徒たちはこのプロジェクトの趣旨を理解し、主体的にリボン作りに励んでくれました。その結果、1・2年次生はそれぞれ自分のものとその他に2個を作製、3年次生はライフデザイン選択の生徒たちが3年次生の全員分を作製、その他にも教員一人一人にも作製したリボンを渡してくれました。

そして、このほど、生徒が作製したリボンを小林教諭が事務局へ持参しました。三条生が作ったシトラスリボンが差別・偏見のない地域社会への第一歩になってくれるものと思います。



CLASSプロジェクト

第1回探究コンソーシアム会議開催

9月7日にCLASSプロジェクト第1回コンソーシアム会議がオンラインで開催されました。これは今年から3年間道教委の指定を受け実施する事業で、地域と協働した教育活動を展開することで社会に開かれた教育課程の実現を目指すものです。本校では都市型の探究カリキュラムの構築を目指し、地域の人材を活用することで生徒の学び意欲を引き出し、自らの進路を切り拓くことができるようになることを目標としています。



この活動に対する指導・助言をするだけでなく時には直接支援していただく組織が「帯広三条高校探究コンソーシアム」です。構成員は本校コーディネーターのとかち子育て支援センター長・長岡行子さんをはじめ、行政、大学、民間企業など多方面にわたる素晴らしい方々をお願いすることができました。会議では日本医療大講師・長谷川聡様からは『「保健、医療、福祉、介護」という広い視野の中で看護も捉え直してほしい。その実態を生徒ばかりではなく保護者にも理解してほしい。」など、多くの助言をいただきました。今後、コンソーシアムメンバーの力も借りながら実りあるものにしていきたいと思っています。また、本プロジェクトの活動について今後もHPで報告していきます。

夏季略装の見直しを進めています！

近年の夏における気温の上昇を踏まえ、夏季略装について指定ポロシャツの検討を進めています。これを進めるに際し、生徒全員にアンケートを実施。生徒の97.6%が「指定ポロシャツ導入」と「ベスト着用なし」に賛成し、あわせて求めるものとして①涼しさ②速乾性③色透けしない④値段の安さがあがりました。この結果を受けて①から④を踏まえて指定ポロシャツの導入を進めることに関してPTA役員の方々にも伺ったところ、同意を得ることができました。

今後、来年度からの導入に向けて、「涼しさ」「速乾性」を重視した素材と、「色透けしない」ものを重視してさらに検討を進めていきます。また、最終的なデザインや色などはアンケートをとるなどして生徒とともに決定していきたいと考えていますので、ご理解をいただきたいと思っています。

【生徒アンケート結果】

期待すること	%
涼しさ	90.5
速乾性	59.1
色透けしないこと	52.4
値段の安さ	40.7
デザイン	1.5

第15回 1-2担任・バドミントン部顧問 櫻井 学 教諭

苦勞した分だけ人は幸せになる

◆障がいのある人もいて当たり前の社会に

パラリンピックでのバドミントン競技は今大会で初めて採用されたのですが、私自身も初めてパラ競技の審判をしました。その中に行くとこれが当たり前のような感覚になり、障がい者と健常者という区別など初めからなかったのではないかという不思議な感覚になりました。プレイヤーの方々は、様々な事情があってパラ競技を始めたのでしょうか、それを決して障壁だとは思っていません。むしろそれを受け入れ、乗り越えていく人としての力強さを私は感じました。障がいのあるなしにかかわらず、それを自然のものと受け入れる社会にしていなくてはならないと強く感じました。

◆人との出会いが新しいチャレンジに

私は三条高校バドミントン部OBですが、プレイヤーとしては全道大会出場を目指す全く平凡な選手でした。高校教員としてバドミントン指導に携わってから、多くの方々からの勧めやサポートがあったお陰で国際審判員にチャレンジすることができました。英語が出来ることが後押しになりました。人との出会いが自分を変えてくれたといっても過言ではありません。まだこのチャレンジは続きます。次は線審ではなく主審でオリンピックに参加できるよう頑張ります。

◆何をすべきか、答えは案外身近なところにある

さきほどバドミントンで平凡な選手と言いましたが、勉強も本当に平凡でした。現役の時に受験した大学はみんな不合格。母と一緒に泣きました。受験料だけでも相当な金額を負担させてこれかと、

本当に情けなかったです。受験した学部も何をやりたいのかわからなくて、なんとなく就職に有利になりそうだという理由で経済学部を受けていました。期せずして1年の猶予をもらったので、自分は何をすべきか考えて英語を学ぼうと決めました。大学卒業後カナダに1年間留学するのですが、帰国後TOEICの点数が全然伸びていなくて焦りました。それで友達の手を頼ってJOYの浦島先生に相談することができました。そしたら「音読だよ」って。それから必死に音読したら点数が跳ね上がりました。答えは案外身近なところにあるものです。英語力を伸ばすなら音読です！

◆高校時代の願い

高校卒業文集の「10年後の私」欄に、「三条高校で教員している」と書いたのですが、本当に10年後、時間講師としてでしたが三条高校の教壇に立っていました。そしてその年に採用試験に合格。まさかこうしてまた三条高校に戻ってくるとは思ってもみませんでした。願うことって大事だなと思います。思い描くことがスタート。そしてそれに向かって苦勞した分、必ず幸せになると私は信じています。生徒のみなさん、苦勞を厭わず頑張ってください！



インタビュー

きらい

来月、第74回全日本合唱コンクール全国大会に出場

合唱部 前田百瑛子さん 小田遥輝くん 伊丹音葉さん



小田くん 前田さん 伊丹さん

副部長の小田くん、そして学生指揮者の伊丹さんです。6月の北海道大会で1位を獲得した時を振り返って、前田さんは「去年コンクールがなかったので自分たちのレベルがどれ位なのかかわからない中で、正直、優勝できるとは思っていませんでした。」と本音を口にした後、「マスクをしながら歌を歌うことの難しさがまずあって、隣と1m、前後2m距離をあけなくてはならないのがとても厳しかったです。他の人の声が聞こえなくて、頼りになるのは自分の声だけ。ハーモニーを合わせるのが本当に難しかったです。」とコロナ禍の中の苦勞を話してくれました。

10月28日から大分県で行われる第74回全日本合唱コンクール全国大会に出場する合唱部の3名の方にお話を伺いました。部長の前田さん、

今回のメンバーには男子が4人。あくまで女声合唱の部門での出場なので、男子部員にはそれなりの苦勞があるようで小田くんは「裏声で歌わなくてはならないので、逆に声量が出ずに悩みました」とのこと。学生指揮者の伊丹さんは、日頃の発声練習の指揮をとるばかりではなく、豊田先生が不在の時などはハーモニーのチェックもするそうですが、彼女によると「過去のコンクールでは女声合唱で男声が出過ぎて酷評されたことがあったのですが、うちの男声は全員女声になじむいい声なんです。」と男子部員を褒めておりました。それには小田くんもにっこり。これから迎える全国大会に向けての抱負を伺うと、「コロナの関係もあるので、とにかく35人全員がそろって大分で歌いたいです」と小田くん。伊丹さんは「全国で金賞をとるのが目標ですが、聞いてくださる観客の方に“雨のように降ってくる”合唱を届けたいと思っています。」と話してくれました。「部長の仕事はみんなのモチベーションをあげる。時にはリラックスさせるような場を和ませるのも自分の仕事。コンクール前は集中させるようなもっていきます。」と語っていた前田さん。「結果はとにかく自分たちがやってきたことを表現したいです。」と締めくくってくれました。

